



## ●胡蝶蘭雑感

今年も職場の窓辺で胡蝶蘭が咲き始めました。南側の窓辺で私の部屋を訪れるみなさんの目を楽しませてくれるようになって、かれこれ7回目の開花です。太陽の日差しに向かい伸び伸びと咲く姿は、胡蝶蘭という高級感のある響きとは不釣り合いな、野性味さえ感じます。胡蝶蘭の花の色は、白、ピンク、青、紫、黄、紅白（リップ系）の6種類あるとのこと。赤や紫の花色はアントシアニン、黄はカロテノイドという色素によるもので、これらの色素の種類や組み合わせによって多様な色合いが生まれます。美しい凛とした花姿からお祝いシーンの贈り物として人気がありますが、贈答用には色の持つ意味合いや花言葉が関係しているようです。白色の胡蝶蘭は慶事のみならず、多くの場面で活用でき、母の日にはピンク、紅白の胡蝶蘭は祝いごと、長寿祝いなど目上の方へのプレゼントなら紫、尊敬する人に贈る場合は青、開業・開店祝いには黄色が喜ばれるそうです。

私も幾度となく、この胡蝶蘭に癒されたことに気づきました。 (監査：井澤尚子)  
[https://kyoto-omuro.jp/blog/phalaenopsis\\_and\\_orchid\\_color/](https://kyoto-omuro.jp/blog/phalaenopsis_and_orchid_color/)

## ●日本の伝統的な色名・団十郎茶

飛鳥時代から位色の制度が支配層に採り入れられ、江戸時代になると幕府や藩が「奢侈禁止令」の形で庶民の着衣の色に制限を加えていた。江戸時代の庶民は、その隙間をついて、茶色や鼠色に好みをおき、「四十八茶百鼠」と言われる彩度の低い色に流行色を見出していった。

市川団十郎が成田家伝来の「暫」に着た素襖の三舛大紋の柿渋色は、団十郎茶と呼ばれ庶民に流行した。

役者の俳号を使った役者色も多く、尾上菊五郎の梅幸茶、瀬川菊之丞の路考茶、嵐吉三郎の璃寛茶、中村歌右衛門の芝翫茶などがある。

松本幸四郎の屋号高麗屋からの高麗納戸や、市川団十郎の家紋の三舛に由来した藍染系の舛花色も役者色である。岩井半四郎の岩井茶、花川戸助六の鉢巻の江戸紫も江戸歌舞伎から流行した。

時代によって、色やその配色は、流行の要因を底に秘めながら、消費者大衆の願望の結晶として、団十郎茶は江戸時代の彩りを作り出し、市村座の幕の柿渋色から、現代の歌舞伎座の定式幕の三色の中の柿色として受け継がれている。 (永田泰弘)

## ●大辞泉ひろいよみ 113ーし

**紫檀**：したん。マメ科の常緑小高木。淡黄色の花を多数つける。材は周辺部が白、周辺部が黒紅紫色で、木目が美しく堅いことから家具材として徴用される。インド南部の原産。

**紫竹**：しちく。イネ科の竹。高さ三～八メートル。茎は二年目から黒紫色に変わる。観賞用に栽培。黒竹。柴竹竹。

**七彩**：しちさい。七色。また、美しいいろいろ。 **七色**：しちしょく。赤・橙・黄・緑・青・藍・堇（紫）の七種類の色。太陽光線をスペクトルで分けたときに見られる色。なないろ。

**七赤**：しちせき。九星の一。星では水星。方向では北。

**視直径**：しちよっけい。天体の見かけの直径を角度で表したもの。角直径。

**漆黒**：しっこく。黒うるしを塗ったように黒くてつやがあること。また、その色。

**紫庭**：してい。「紫」は天帝の座の紫微星の意。内裏。皇居。宮中。

**紫泥**：しでい。無釉薬で赤紫色または紫褐色の陶器。天青泥といわれる土を用いた、中国宜興窯のものが代表的。朱泥。

**視点**：視線の注がれるところ。物事を見たり考えたりする立場。観点。透視図法の一点。

\*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)